

# 新学習指導要領を踏まえた 体育の在り方について

岡出美則（日本体育大学）

2017.6.19

# はじめに(1)

「ケンタッキーの人間は今でもトヨタ進出を歓迎し、のちに豊田章男（現・社長）がリコール事件で攻撃された時も敢然と守った。アメリカ人の方が日本人一般よりむしろトヨタ生産方式を評価し、フォード式の代わりになることを体感したと言えよう。

トヨタ生産方式が世界各国の生産現場で採用されているのは、日本で普及しているからだけではない。同じ方式がアメリカでもちゃんと機能したからだ。海外での成功事例があるから、自動車業界だけでなく、他産業も導入する決断をしたのである。」（野地、2017,pp.67-68）

## はじめに(2)

「北米にトヨタ生産方式を持ち込んだひとり、池淵浩介（元・副会長）は『私たちはアメリカのワーカーを信頼した』と語る。

『あの頃、ビッグ3の数千人規模の工場には管理職のエンジニアが200人はいました。みんな、ストップウォッチを持って、ワーカーを監視し、作業時間を計っていたのです。そして、標準時間を決めて、組合に説明してから仕事が始まった。エンジニアは組合に説明するために工場にいるようなもんだった。

そんな話を（トヨタ生産方式の普及に尽力した）大野（耐一）さんにしたら、『標準時間とか作業手順なんてものはワーカーが自分で決めればいい』と言っていた。

人間は自由を与えると、仕事をしたくなるんですよ。トヨタ生産方式は強制ではなく、自由を与えるものです。だから生産性が向上したんです。』

# 全体構成

- I 新学習指導要領の背景と概要
- II 授業実施に際して直面する諸課題
- III 質の高い授業の保証に向けて

# I 新学習指導要領の背景と概要

## 新学習指導要領 実施スケジュール(概要)

	平成20年度	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
幼稚園	告示 周知・徹底	全面実施				
小学校	告示 周知・徹底	先行実施	総則等 算数、理科	全面実施		
中学校	告示 周知・徹底	先行実施	総則等 数学、理科	全面実施		
高等学校	告示	周知・徹底	先行実施	総則等	先行実施(年次進行) 数学、理科	年次進行 で実施

# 現行学習指導要領改訂の趣旨

- ① 生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する基礎を培うことを重視し、運動の楽しさや喜びを味わうことができるようにするとともに、発達の段階のまとまりを考慮し、小学校、中学校及び高等学校を見通した指導内容の体系化を図ること。
- ② 指導内容の確実な定着を図る観点から、指導内容を明確に示すとともに、学校段階の接続を踏まえ、第1学年及び第2学年においては、領域の取上げ方の弾力化を図ること。また、第3学年においては、特性や魅力に応じた選択のまとまりから選択して履修できるようにすること。
- ③ 体力の向上を重視し、「体づくり運動」の一層の充実を図るとともに、学校の教育活動全体や実生活で生かすことができるようにすること。
- ④ 基礎的な知識の確実な定着を図るため、発達の段階を踏まえて知識に関する領域の構成を見直し、各領域に共通する内容に精選するとともに、各領域との関連で指導することが効果的な内容については、各領域で取り上げるよう整理すること。
- ⑤ 保健分野においては、個人生活における健康・安全に関する内容を重視し、指導内容を改善すること。
- ⑥ また、健康の保持増進のための実践力の育成のため、自らの健康を適切に管理し改善していく思考力・判断力などの資質や能力を育成する観点から、系統性のある指導ができるよう内容を明確にすること。

# 「健やかな体をはぐくむ教育の在り方に関する専門部会審議状況報告」 (2005.7.27)にみる資質・能力

体育科の目的の具体的内容（健やかな体を育む教育の在り方に関する専門部会、2005）			
(1) 身体能力	① 身体能力の要素	1) 「短時間に集中的に力を発揮する身体能力」	全力で加速した後、数十メートルは最高スピードを維持して走ることができること全身を使って、その場で高く、あるいは遠くへ跳ぶことができること
		2) 「持続的に力を発揮する身体能力」	一定のペースで数分間以上走り続けることができること自分の体重と同じ程度のものを、一定時間以上支えたり、運んだりすることができること
		3) 「柔軟性を発揮する身体能力」	膝を伸ばしたまま上体を一定の深さまで曲げること
		4) 「巧みに身体を動かす身体能力」	水の中で、浮いたり、潜ったり、進んだり、息継ぎをすることができ、二つ以上の泳ぎ方で一定の距離を泳ぐことができること身体を、柔らかく動かしたり、力強く動かしたり、リズムを取って動かすことができることマットや鉄棒で、体を支えたり、回ったりすることができること大きさの異なるボールを、手や体や足を使って、捕る、投げる、打つ、けるなど様々な操作することができること
	② 生涯にわたって運動やスポーツに親しむための身体能力		
(2) 態度	1) 「運動やスポーツ自体」の価値に対する態度	運動やスポーツを「すること」や「見る」「支える」ことへの関心があること	
	2) 「チャレンジすること」の価値に対する態度	次の課題にチャレンジしようとする意志があること	
	3) 「運動やスポーツを継続すること」の価値に対する態度	生涯にわたって運動やスポーツに取り組もうとする意志があること	
	4) 「フェアプレー」に関する態度	結果にかかわらず相手を認めるなど、共に運動やスポーツを行う仲間を尊重し合おうとする意志があること	
	5) 「協力・責任」に関する態度	お互いの合意に基づいて仲間と助け合う、自分の責任を果たすなど、仲間と協力しようとする意志があること	
(3) 知識、 思考・判断	① 運動やスポーツに関する知識	1) 運動やスポーツに関する知識	人間はなぜ運動するのかといったことなどに関する知識（発育発達、意義、体力の考え方など）運動やスポーツについての考え方や発展の歴史に関する知識運動が「身体と心に与える影響」に関する知識オリンピックムーブメントに関する知識ルールや用具の使い方に関する知識
		2) 運動やスポーツの動き、学び方などに関する知識	
	② 運動やスポーツに関する思考・判断	1) 運動やスポーツの様々な場面で、自分や他人あるいは物体の動きを見て、分析的に考え、判断することができる	
		2) 運動やスポーツの様々な場面で、健康 <sup>と</sup>	・安全に関し、科学的に考え判断することができること
		3) 運動やスポーツのルールを変えたり、練習の場を作ったりするなど、創意・工夫ができること	
	③ 運動やスポーツにおける健康・安全に関する知識	1) 健康に生活するために必要な体力に関する知識	
		2) けがや障害（骨折、捻挫、脱臼、創傷）に関する知識	けがや障害の予防法けがや障害の対処法
3) 健康・安全に運動することに関する知識			

# 運動に親しむ資質や能力

## I 小学校（小学校学習指導要領解説、p.10）

- 1)運動への関心や自ら運動をする意欲,
- 2)仲間と仲よく運動をすること,
- 3) 各種の運動の楽しさや喜びを味わえるよう自ら考えたり工夫したりする力,
- 4)運動の技能など

## II 中学校（中学校学習指導要領解説、p.15）

- 1)それぞれの運動が有する特性や魅力に応じて、その楽しさや喜びを味わおうとするとともに、公正に取り組む、互いに協力する、自己の責任を果たす、参画するなどの意欲や健康・安全への態度,
- 2)運動を合理的に実践するための運動の技能や知識,
- 3)それらを運動実践に活用するなどの思考力、判断力など

# 現行学習指導要領に見る発達の段階のとらえ方：

生涯にわたる豊かなスポーツライフの実現に向けて（文部科学省、2015,p.3）

## 【第1段階】

小学校低・中学年では、核となる易しい運動を幅広く行い、基本的な動きを身に付けていくことが大切です。また、児童は仲間とかかわったり、動きを工夫したりしながら運動遊びや運動の楽しさを味わうことが求められます。一方、教師は、高学年以降につながる運動やスポーツの基本となる動きや意欲の育成に努め、結果として体力の養成を目指します。

## 【第2段階】

小学校高学年、及び中学校第1学年及び第2学年の段階は、中学校第3学年以降に始まる領域の選択に向けて、次第にルール等を本格的な運動やスポーツに近づける段階です。全ての運動領域において、それぞれの特性や魅力に触れることができるような指導が大切です。小学校高学年と中学校第1学年の校種の接続に配慮した指導が求められます。

## 【第3段階】

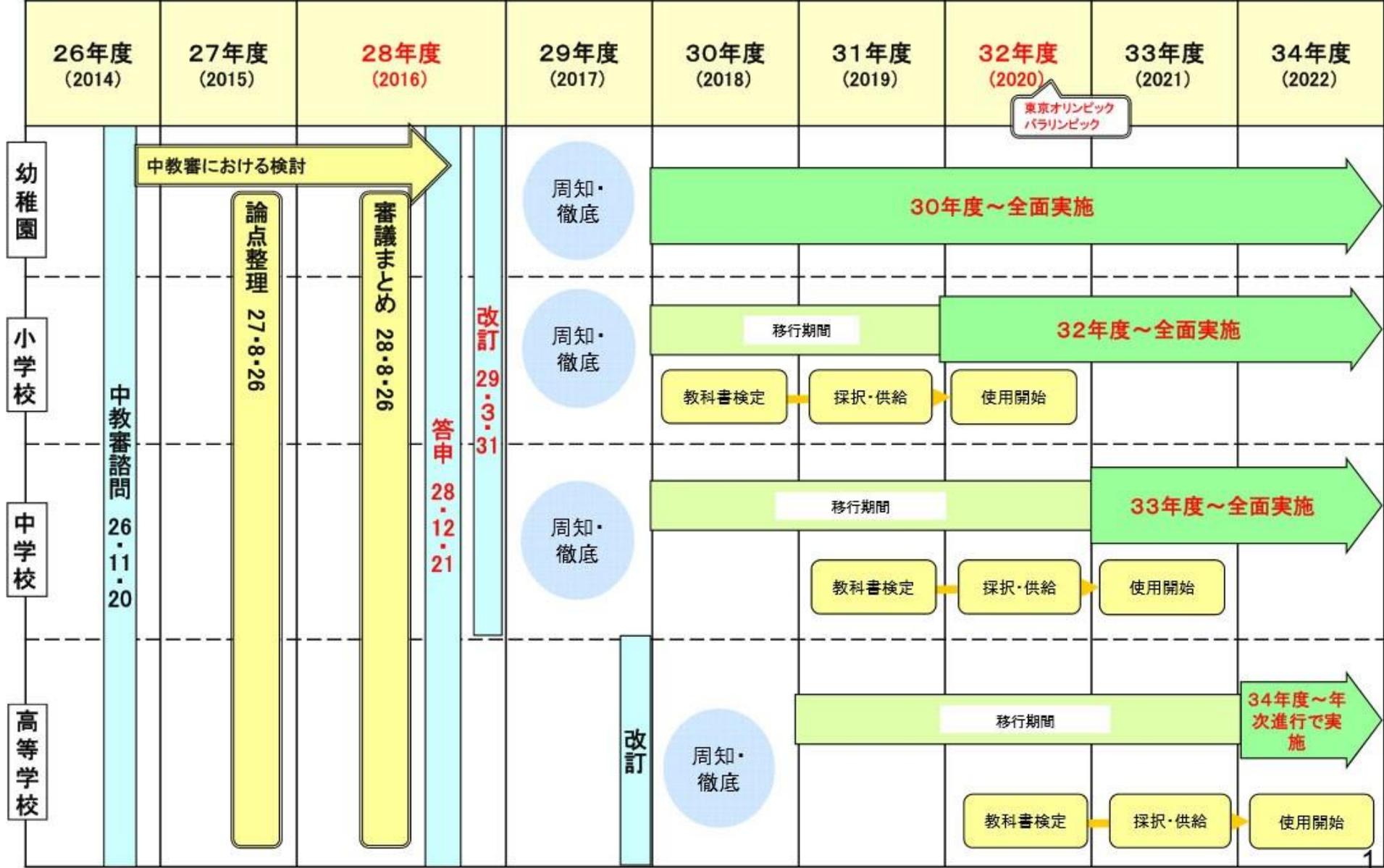
中学校第3学年から高等学校卒業時までの最終段階です。運動の特性や魅力に応じた領域のまとまりから自ら選択し（中学校3学年及び高等学校入学年次）、自己のスポーツの嗜好性を確認した後、高等学校のその次の年次以降においては、自らが取り組みたい領域を選択し、卒業後の豊かなスポーツライフの実現を図るため、主体的な取組を促す指導の工夫が求められます。

# 中学校体育の評価規準

## － 国立教育政策研究所（2010年11月）－

運動への関心・意欲・態度	運動についての思考・判断	運動の技能	運動についての知識・理解
<p>運動の楽しさや喜びを味わうことができるよう、公正、協力、責任などに対する意欲をもち、健康・安全に留意して、学習に積極的に取り組もうとする。</p>	<p>運動を豊に実践するための課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。また、体力を高めるための運動の組み合わせ方を工夫している。</p>	<p>運動の合理的な実践を通して、勝敗を競ったり、攻防を展開したり、表現したりするための各領域の運動の特性に応じた基本的な技能を身に付けている。</p>	<p>各運動の特性や成り立ち、技の名称や行い方、伝統的な考え方、各領域に関連して高まる体力、健康・安全の留意点についての具体的な方法及び運動やスポーツの多様性、運動やスポーツが心身の発達に与える効果についての考え方を理解している。</p>

# 今後の学習指導要領改訂に関するスケジュール（現時点の進捗を元にしたイメージ）



東京オリンピック  
パラリンピック

改訂 29・3・31  
答申 28・12・21

# 学習指導要領等の改善の方向性

- (1) 学習指導要領等の枠組みの見直し
- (2) 教育課程を軸に学校教育の改善・充実の好循環を生み出す  
「カリキュラム・マネジメント」の実現
- (3) 「主体的・対話的で深い学び」の実現（「アクティブ・ラーニング」の  
視点）

# 学習指導要領の枠組みの見直しに向けた方針

- ①「何ができるようになるか」（育成を目指す資質・能力）
- ②「何を学ぶか」（教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成）
- ③「どのように学ぶか」（各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実）
- ④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」（子供の発達を踏まえた指導）
- ⑤「何が身に付いたか」（学習評価の充実）
- ⑥「実施するために何が必要か」（学習指導要領等の理念を実現するために必要な方策）（中央教育審議会、2016,p.21）

# カリキュラム・マネジメントの三つの側面

- (1) 各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標 53 を踏まえた教科等横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していくこと。
- (2) 教育内容の質の向上に向けて、子供たちの姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連の P D C A サイクルを確立すること。
- (3) 教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源も含めて活用しながら効果的に組み合わせること（中央教育審議会、2016, pp. 23-24）。

# 現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力としての豊かな スポーツライフを実現する力

- ・健康・安全・食に関する力
- ・主権者として求められる力
- ・新たな価値を生み出す豊かな創造性
- ・グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力
- ・地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等に生かす力
- ・自然環境や資源の有限性等の中で持続可能な社会をつくる力
- ・豊かなスポーツライフを実現する力（中央教育審議会 2016, p. 41）

# スポーツへの期待

- 2020年に開催される東京オリンピック・パラリンピック競技大会も、その開催を契機に、子供たちがスポーツへの関心を高め、「する、みる、支える、知る」などのスポーツとの多様な関わり方を楽しめるようにすることが期待されているが、効果はそれにとどまらない。スポーツを通じて、他者との関わりを学んだり、ルールを守り競い合っていく力を身に付けたりできるようにしていくこと、一つの目標を立ててそれに向かって挑戦し、やり遂げることの意義を実感すること、さらには、多様な国や地域の文化の理解を通じて、多様性の尊重や国際平和に寄与する態度を身に付けたり、ボランティア活動を通じて、他者への共や思いやりを育んだりしていくことにもつながるものである
- 国際オリンピック委員会では、オリンピックの価値を、卓越、友情、敬意／尊重とし、オリンピック精神の教育的価値を、努力から得られる喜び、フェアプレー、他者への敬意、向上心、体と頭と心のバランスと整理している。また、国際パラリンピック委員会では、パラリンピックの価値を、勇気、決意、インスピレーション、等としている（中央教育審議会、2016, p. 40）。
- その際、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機とする「心のバリアフリー」の推進の動向も踏まえ、全ての人々が、障害等の有無にかかわらず、多様性を尊重する態度を育成できるようにすることが求められる(中央教育審議会、2016,p.59)。

# 体育、保健体育科の 現行指導要領の成果と課題

- 運動やスポーツが好きな児童生徒の割合が高まったこと、体力の低下傾向に歯止めが掛かったこと、「する、みる、支える」のスポーツとの多様な関わりの必要性や公正、責任、健康・安全等、態度の内容が身に付いていること、子供たちの健康の大切さへの認識や健康・安全に関する基礎的な内容が身に付いていることなど、一定の成果が見られる。
- 他方で、習得した知識や技能を活用して課題解決することや、学習したことを相手に分かりやすく伝えること等に課題があること、運動する子供とそうでない子供の二極化傾向が見られること、子供の体力について、低下傾向には歯止めが掛かっているものの、体力水準が高かった昭和60年ごろと比較すると、依然として低い状況が見られることなどの指摘がある。また、健康課題を発見し、主体的に課題解決に取り組む学習が不十分であり、社会の変化に伴う新たな健康課題に対応した教育が必要との指摘がある（中央教育審議会、2016, p. 186）。

# 保健体育に関連して指摘されている課題

- 体力については、**運動する子供とそうでない子供の二極化傾向**が見られること、スポーツに関する科学的知見を踏まえて、「**する**」のみならず、「**みる、支える、知る**」といった**多様な視点からスポーツとの関わりを考えることができるようにすること**などが課題となっていることが指摘されている。
- 健康に関しては健康に関連して必要な情報を自ら収集し、**適切な意思決定や行動選択を行うことができる力を育む**ことが課題として示されている（中央教育審議会、2016,p.7）。

# 学習指導要領改訂の方向性（案）

平成28年5月26日  
体育・保健体育、健康、安全WG  
資料2-3

平成28年5月23日  
教育課程部会  
総則・評価特別部会  
資料3-1

## 新しい時代に必要となる資質・能力の育成

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

## 何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、  
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む

### 「社会に開かれた教育課程」の実現

各学校における「カリキュラム・マネジメント」の実現

## 何を学ぶか

### 新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた 教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共  
（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を  
構造的に示す

**学習内容の削減は行わない\***

## どのように学ぶか

### 主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ ラーニング」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習  
得など、新しい時代に求  
められる資質・能力を育成  
知識の量を削減せず、質  
の高い理解を図るための  
学習過程の質的改善

深い学び  
対話的な学び  
主体的な学び

\*高校教育については、益々な事実に基づく知識の増記が大学入学選抜で問われることが課題になっ  
ており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

# 資質・能力の三つの柱

(1)「何を理解しているか、何ができるか（生きて働く「知識・技能」の習得）」

\*この「技能」には、身体的技能や芸術表現のための技能も含まれる。

(2)「理解していること・できることをどう使うか（未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成）」

(3)「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか

（学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵かん養）」

（中央教育審議会、2016,pp.28-31）

# 主体的に取り組む態度

- 評価の観点のうち「主体的に学習に取り組む態度」については、学習前の診断的評価のみで判断したり、挙手の回数やノートの取り方などの形式的な活動で評価したりするものではない。子供たちが自ら学習の目標を持ち、進め方を見直しながら学習を進め、その過程を評価して新たな学習につなげるといった、学習に関する自己調整を行いながら、粘り強く知識・技能を獲得したり思考・断・表現しようとしたりしているかどうかという、意思的な側面を捉えて評価することが求められる。
- このことは現行の「関心・意欲・態度」の観点についても本来は同じ趣旨であるが、上述の挙手の回数やノートの取り方など、性格や行動面の傾向が一時的に表出された場面を捉える評価であるような誤解が払拭し切れていないのではないかと、という問題点が長年指摘され現在に至ることから、「関心・意欲・態度」を改め「主体的に学習に取り組む態度」としたものである。こうした趣旨に沿った評価が行われるよう、単元や題材を通じたまとまりの中で、子供が学習の見通しを持って学習に取り組み、その学習を振り返る場面を適切に設定することが必要となる。
- こうした姿を見取るためには、子供たちが主体的に学習に取り組む場面を設定していく必要があり、「アクティブ・ラーニング」の視点からの学習・指導方法の改善が欠かせない。また、学校全体で評価の改善に組織的に取り組む体制づくりも必要となる（中央教育審議会、2016, p. 62）。

# 各教科等の特質に応じた 「見方・考え方」

- 子供たちは、各教科等における習得・活用・探究という学びの過程において、各教科等で習得した概念（知識）を活用したり、身に付けた思考力を発揮させたりしながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう。こうした学びを通じて、資質・能力がさらに伸ばされたり、新たな資質・能力が育まれたりしていく。
- その過程においては、“**どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか**”という、**物事を捉える視点や考え方**も鍛えられていく。こうした視点や考え方には、教科等それぞれの学習の特質が表れるところであり、例えば算数・数学科においては、事象を数量や図形及びそれらの関係などに着目して捉え、論理的、統合的・発展的に考えること、国語科においては、対象と言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉え、その関係性を問い直して意味付けることなどと整理できる。
- こうした**各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方**が「**見方・考え方**」であり、各教科等の学習の中で働くだけでなく、大人になって生活していくに当たっても重要な働きをするものとなる（中央教育審議会、2016, p. 33）。

# 各教科と三つの資質・能力の関係

- 今回の改訂においては、**全ての教科等について、この力はこの教科等においてこそ身に付くのだ**といった、各教科等を学ぶ本質的な意義を捉え直す議論が展開され、各教科等において育成を目指す資質・能力が三つの柱に基づき整理されている。こうした議論は、教科等を越えて、各学校段階や初等中等教育全体で育成することを目指す資質・能力の在り方に関する議論と往還させながら進められてきた。
- こうした議論の積み重ねを踏まえ、**各教科等の教育目標や内容については、第2部において示すとおり、資質・能力の在り方を踏まえた再編成を進めることが必要である**。なお、幼稚園教育要領においても、資質・能力の三つの柱について幼児教育の特質をまえた整理を行い、「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という現在の領域構成を引き継ぎつつ、内容の見直しを資質・能力の三つの柱に沿って図ることが求められる（中央教育審議会、2016, p. 33）。

# 各教科の見方・考え方と三つの資質・能力の関係

「見方・考え方」を支えているのは、各教科等の学習において身に付けた資質・能力の三つの柱である。各教科等で身に付けた知識・技能を活用したり、思考・判断力・表現力等や学びに向かう力・人間性等を發揮させたりして、学習の対象となる物事を捉え思考することにより、各教科等の特質に応じた物事を捉える視点や考え方も、豊かで確かなものになっていく。物事を理解するために考えたり、具体的な課題について探究したりするに当たって、思考や探究に必要な道具や手段として資質・能力の三つの柱が活用・發揮され、その過程で鍛えられていくのが「見方・考え方」であるといえよう（中央教育審議会、2016, p. 34）。

# 内容と指導法提案の意図

変化を見通せないこれからの時代において、新しい社会の在り方を自ら創造することができる資質・能力を子供たちに育むためには、教員自身が習得・活用・探究という学びの過程全体を見渡し、個々の内容事項を指導することによって育まれる資質・能力を自覚的に認識しながら、子供たちの変化等を踏まえつつ自ら指導方法を不断に見直し、改善していくことが求められる。

- このような中で次期学習指導要領等が学習・指導方法について目指すのは、特定の型を普及させることではなく、後述のような視点に立って学び全体を改善し、子供の学びへの積極的関与と深い理解を促すような指導や学習環境を設定することにより、子供たちがこうした学びを経験しながら、自信を育み必要な資質・能力を身に付けていくことができるようにすることである。

(中央教育審議会、2016, p. 49)

今回の改訂が目指すのは、第4章2. (3) において述べたように、学習の内容と方法の両方を重視し、子供の学びの過程を質的に高めていくことである。「見方・考え方」を軸としながら、幅広い授業改善の工夫が展開されていくことを期待するものである(中央教育審議会、2016,p.52)。

# 「主体的・対話的で深い学び」とは何か

「主体的・対話的で深い学び」の実現とは、以下の視点に立った授業改善を行うことで、学校教育における質の高い学びを実現し、学習内容を深く理解し、資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的（アクティブ）に学び続けるようにすることである。

①学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。

子供自身が興味を持って積極的に取り組むとともに、学習活動を自ら振り返り意味付けたり、身に付いた資質・能力を自覚したり、共有したりすることが重要である。

②子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」が実現できているか。

身に付けた知識や技能を定着させるとともに、物事の多面的で深い理解に至るためには、多様な表現を通じて、教職員と子供や、子供同士が対話し、それによって思考を広げ深めていくことが求められる。

③習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう「深い学び」が実現できているか（中央教育審議会、2016, pp. 49-50）。

# 「主体的・対話的で深い学び」の実現

- 「主体的な学び」は、運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康についての興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く自ら取り組み、それを考察するとともに学習を振り返り、課題を修正したり新たな課題を設定したりする学びの過程と捉えられる。各種の運動の特性や魅力に触れたり、自他の健康の保持増進や回復を目指したりするための主体的な学習を重視するものである。
- 「対話的な学び」は、運動や健康についての課題の解決に向けて、児童生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深めていく学びの過程と捉えられる。自他の運動や健康についての課題の解決を目指して、協働的な学習を重視するものである（中央教育審議会、2016, p. 191）。
- 「深い学び」は、自他の運動や健康についての課題を発見し、解決に向けて試行錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学びの過程と捉えられる。児童生徒の発達段階に応じて、これらの深い学びの過程を繰り返すことにより、体育科、保健体育科の「見方・考え方」を豊かで確かなものとすることを重視するものである（中央教育審議会、2016, p. 192）。

# 「主体的・対話的で深い学び」を生み出す意図的な授業設計

- また、「主体的・対話的で深い学び」は、1 単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元や題材のまとまりの中で、例えば主体的に学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、学びの深まりを作り出すために、子供が考える場面と教員が教える場面をどのように組み立てるか、といった視点で実現されていくことが求められる。
- こうした考え方のもと、各学校の取組が、毎回の授業の改善という視点を超えて、単元や題材のまとまりの中で、指導内容のつながりを意識しながら重点化していけるような、効果的な単元の開発や課題の設定に関する研究に向かうものとなるよう、単元等のまとまりを見通した学びの重要性や、評価の場面との関係などについて、総則などを通じて分かりやすく示していくことが求められる（中央教育審議会、2016, p. 52）。

# 評価の観点の修正

- 今回の改訂においては、全ての教科等において、教育目標や内容を、資質・能力の三つの柱に基づき再整理することとしている。これは、資質・能力の育成を目指して「**目標に準拠した評価**」を実質化するための取組でもある。
- 今後、小・中学校を中心に定着してきたこれまでの学習評価の成果を踏まえつつ、目標に準拠した評価を更に進めていくため、こうした教育目標や内容の再整理を踏まえて、観点別評価については、目標に準拠した評価の実質化や、教科・校種を超えた共通理解に基づく組織的な取組を促す観点から、小・中・高等学校の各教科を通じて、「**知識・技能**」「**思考・判断・表現**」「**主体的に学習に取り組む態度**」の3観点に整理することとし、指導要録の様式を改善することが必要である。
- その際、「**学びに向かう力・人間性等**」に示された資質・能力には、感性や思いやりなど幅広いものが含まれるが、これらは観点別学習状況の評価になじむものではないことから、評価の観点としては学校教育法に示された「**主体的に学習に取り組む態度**」として設定し、感性や思いやり等については観点別学習状況の評価の対象外とする必要がある。
- すなわち、「**主体的に学習に取り組む態度**」と、資質・能力の柱である「**学びに向かう力・人間性**」の関係については、「**学びに向かう力・人間性**」には①「**主体的に学習に取り組む態度**」として観点別評価（学習状況を分析的に捉える）を通じて見取ることができる部分と、②観点別評価や評定にはなじまず、こうした評価では示しきれないことから個人内評価（個人のよい点や可能性、進歩の状況について評価する）を通じて見取る部分があることに留意する必要がある（中央教育審議会、2016, p. 61）。

# 課題を踏まえた体育科、保健体育科の目標

- 体育科、保健体育科では、これらの課題を踏まえ、心と体を一体としてとらえ、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」を育成することを目標として示す

(中央教育審会, 2016, pp. 186-187) 。

# 体育の見方・考え方

「体育の見方・考え方」については、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現する観点を踏まえ、「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『**する・みる・支える・知る**』の多様な関わり方と関連付けること」と整理することができる（中央教育審議会、2016, p. 187）。運動やスポーツの価値とは、例えば「公正、協力、責任、参画、共生、健康・安全」等が挙げられる（中央教育審議会、2016, p. 187）。

体育については、スポーツとの多様な関わり方を楽しむことができるようにする観点から、**運動に対する興味や関心を高め、技能の指導に偏ることなく、「する、みる、支える」に「知る」を加え、**三つの資質・能力をバランスよく育むことができる学習過程を工夫し、充実を図る。また、粘り強く意欲的に課題の解決に取り組むとともに、自らの学習活動を振り返りつつ、仲間と共に課題を解決し、次の学びにつなげる主体的・協働的な学習過程を工夫し、充実を図る（中央教育審議会、2016, p. 188）。

# 指導内容の示し方

- 体育については、「体育の見方・考え方」を働かせて、三つの資質・能力を育成する観点から、**運動に関する「知識・技能」、運動課題の発見・解決等のための「思考力・判断力・表現力等」、主体的に学習に取り組む態度等の「学びに向かう力・人間性等」**に対応した目標、内容に改善する。その際、児童生徒の発達の段階を踏まえて、学習したことを実生活や実社会に生かし、豊かなスポーツライフを継続することができるよう、小学校、中学校、高等学校を通じて**系統性のある指導**ができるように示す必要がある（中央教育審議会、2016, p. 188）。

(1)知識・技能、(2)思考力・判断力・表現力等、(3)学びに向かう力・人間性等

全体	<p>体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を見付け、その解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) その特性に応じた各種の運動の行い方及び身近な生活における健康・安全について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 運動や健康についての自己の課題を見付け、その解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を養う。</p> <p>(3) 運動に親しむとともに健康の保持増進と体力の向上を目指し、楽しく明るい生活を営む態度を養う。</p>
低学年	<p>(1) 各種の運動遊びの楽しさに触れ、その行い方を知るとともに、基本的な動きを身に付けるようにする。</p> <p>(2) 各種の運動遊びの行い方を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。</p> <p>(3) 各種の運動遊びに進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、健康・安全に留意したりし、意欲的に運動をする態度を養う。</p>
中学年	<p>(1) 各種の運動の楽しさや喜びに触れ、その行い方及び健康で安全な生活や体の発育・発達について理解するとともに、基本的な動きや技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 自己の運動や身近な生活における健康の課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、考えたことを他者に伝える力を養う。</p> <p>(3) 各種の運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、友達の考えを認めたり、場や用具の安全に留意したりし、最後まで努力して運動をする態度を養う。また、健康の大切さに気付き、自己の健康の保持増進に進んで取り組む態度を養う。</p>
高学年	<p>各種の運動の楽しさや喜びを味わい、その行い方及び心の健康やけがの防止、病気の予防について理解するとともに、各種の運動の特性に応じた基本的な技能及び健康で安全な生活を営むための技能を身に付けるようにする。</p> <p>自己やグループの運動の課題や身近な健康に関わる課題を見付け、その解決のための方法や活動を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝える力を養</p> <p>各種の運動に積極的に取り組み、約束を守り助け合って運動をしたり、仲間の考えや取組を認めたり、場や用具の安全に留意したりし、自己の最善を尽くして運動をする態度を養う。また、健康・安全の大切さに気付き、自己の健康の保持増進や回復に進んで取り組む態度を養う。</p>

2017年公示小学校学習指導要領にみる体育の内容領域

低学年	中学年	高学年
A 体つくりの運動遊び（体ほぐしの運動遊び、多様な動きをつくる運動遊び）	A 体つくり運動(体ほぐしの運動、多様な動きをつくる運動)	A 体つくり運動（体ほぐしの運動、体の動きを高める運動）
B 器械・器具を使つての運動遊び（固定施設を使つた運動遊び、マットを使つた運動遊び、鉄棒を使つた運動遊び、跳び箱を使つた運動遊び）	B 器械運動（マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動）	B 器械運動（マット運動、鉄棒運動、跳び箱運動）
C 走・跳の運動遊び（走の運動遊び、跳の運動遊び）	C 走・跳の運動（かけっこ・リレー、小型ハードル走、幅跳び、高跳び）	C 陸上運動（短距離走・リレー、ハードル走、走り幅跳び、走り高跳び）
D 水遊び（水の中を移動する運動遊び、もぐる・浮く運動遊び）	D 水泳運動（浮いて進む運動、もぐる・浮く運動）	D 水泳運動（クロール、平泳ぎ、安全確保につながる運動）
E ゲーム(ボールゲーム、鬼遊び)	E ゲーム（ゴール型ゲーム、ネット型ゲーム、ベースボール型ゲーム）	E ボール運動（ゴール型、ネット型、ベースボール型）
F 表現リズム遊び（表現遊び、リズム遊び）	F 表現運動（表現、リズムダンス）	F 表現運動（表現、フォークダンス）
	G 保健	G 保健
<p>(2)内容の「C 走・跳の運動遊び」については、児童の実態に応じて投の運動遊びを加えて指導することができる。</p> <p>(3)内容の「F 表現リズム遊び」の(1)のイについては、簡単なフォークダンスを含めて指導することができる。</p>	<p>(2)内容の「C 走・跳の運動」については、児童の実態に応じて投の運動を加えて指導することができる。</p> <p>(3) 内容の「E ゲーム」の(1)のアについては、味方チームと相手チームが入り交じて得点を取り合うゲーム及び陣地を取り合うゲームを取り扱うものとする。</p> <p>(4) 内容の「F 表現運動」の(1)については、学校や地域の実態に応じてフォークダンスを加えて指導することができる。</p>	<p>(2) 内容の「A 体つくり運動」の(1)のアと「G 保健」の(1)のウについては、相互の関連を図って指導するものとする。</p> <p>(3) 内容の「C 陸上運動」については、児童の実態に応じて、投の運動を加えて指導することができる。</p> <p>(4) 内容の「D 水泳運動」の(1)のア及びイについては、水中からのスタートを指導するものとする。また、学校の実態に応じて背泳ぎを加えて指導することができる。</p> <p>(5) 内容の「E ボール運動」の(1)については、アはバスケットボール及びサッカーを、イはソフトバレーボールを、ウはソフトボールを主として取り扱うものとするが、これらに替えてハンドボール、タグラグビー、フラッグフットボールなどア、イ及びウの型に応じたその他のボール運動を指導することもできるものとする。なお、学校の実態に応じてウは取り扱わないことができる。</p> <p>(6) 内容の「F 表現運動」の(1)については、学校や地域の実態に応じてリズムダンスを加えて指導することができる。</p>

## II 授業実施に際して直面する諸課題

# マネジメントに関する次の疑問にどのようなアドバイスを提供されますか？

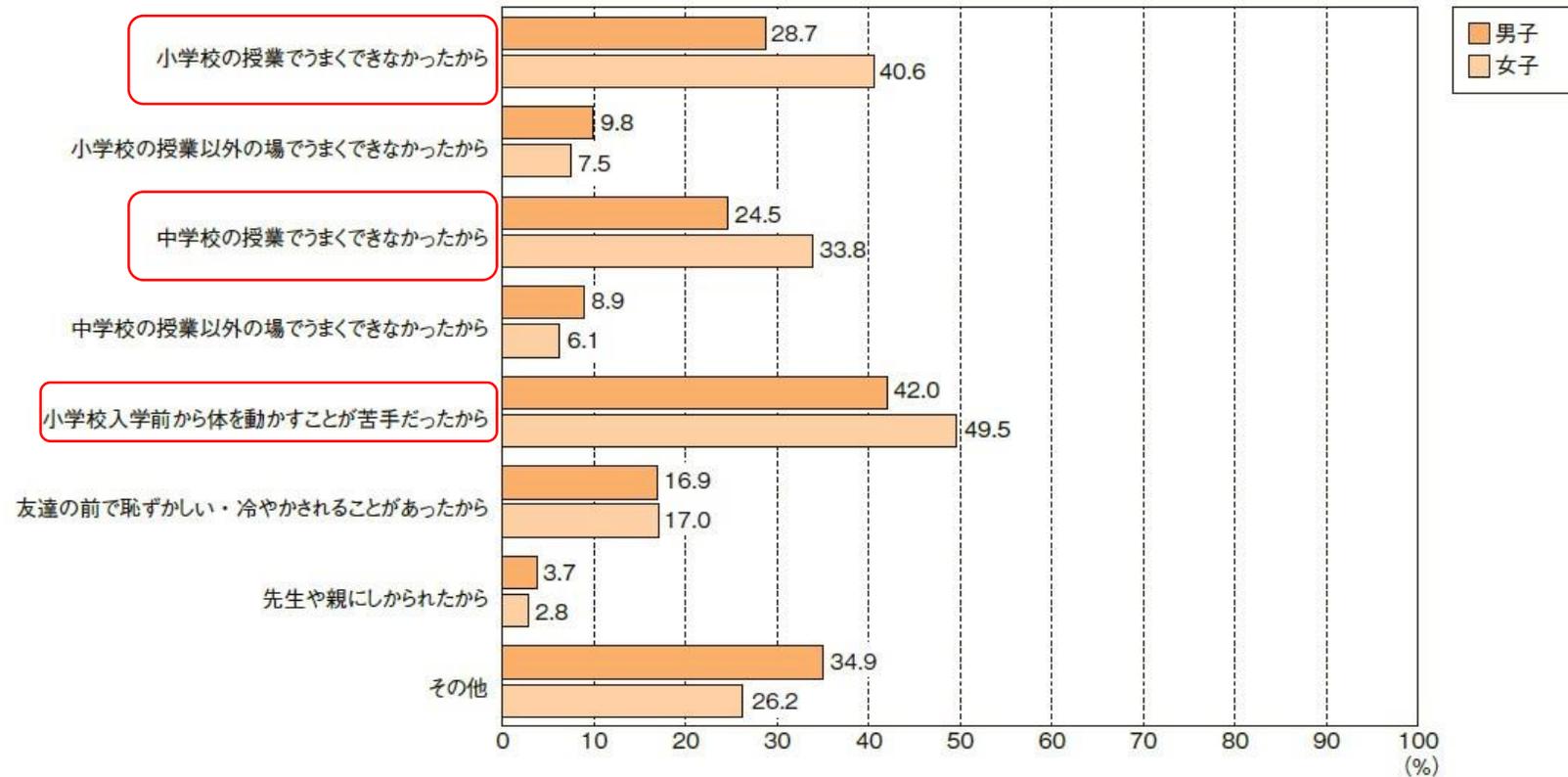
(1)印象に残っていることは2つあります。まず1つ目は、実際私が研究授業を見させていただいた際の準備運動で、先生が号令もかけずにもくもくとやっていることに驚きを感じたのと、しっかり部位が伸ばせているのかなと感じました。また、準備運動をせずに歩き回っている児童がいて、注意をせずにほったらかしにしているのを見て注意しないだと思った事です。2つ目は、自分の行った研究授業で、「マツランド」という題で運動量を確保しながらたくさんの技をさせたいと考え、児童にも少し調査をし、側転をやりたいという声が多かったので取り入れたのですが、行った際には「怖い」という声があがったことです。

# 授業の成果に関する次の疑問にどのようなアドバイスを提供されますか？

- 1)子どもがきちんとボールを投げられない、走り方がおかしい、ボールをキャッチできない（体の使い方が変）。教えることができない子どもたち。特別ルールが裏目に出ている。マットの運び方。準備、片付けの時間。
- 2)体の小さい、力の弱い子どももコツを教えると回れていた。しかし、体の大きな子どもはなかなか回れず、あきらめてしまう印象がある。体が大きいから、太っているからという理由しか、自分では思いつかなかった。もっと解決策があれば楽しさなども伝えられたと思うと、申し訳なかった。

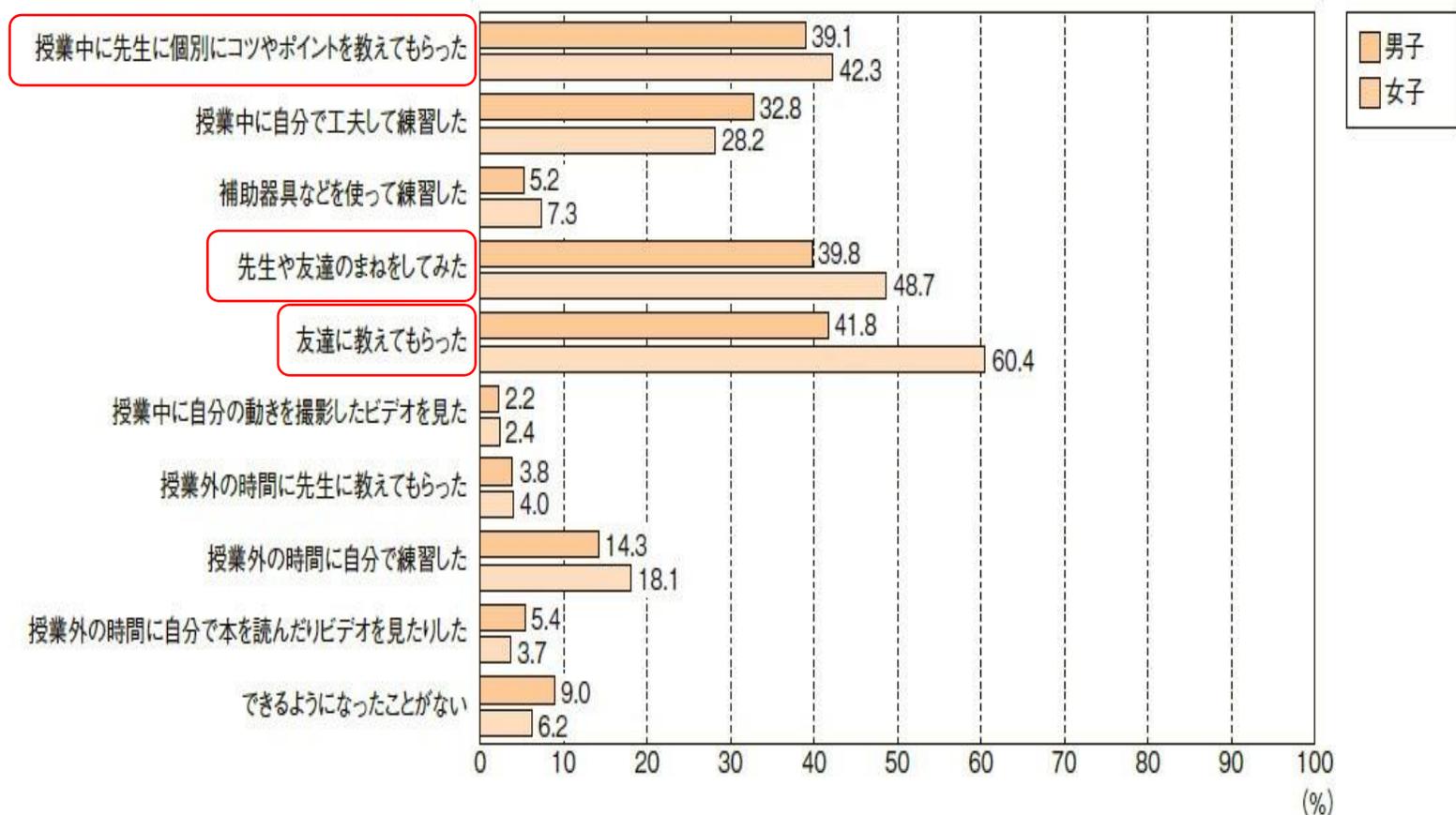
# 中学生が運動やスポーツが好きではなくなる理由

【質問1-2】 質問1で「ややきらい・きらい」と答えた人は、何がきっかけできらいになりましたか。あてはまるものをすべて選んでください。



# 中学生ができるようになる契機

【質問20】 これまでの保健体育の授業で「できなかったことができるようになった」きっかけ、理由はどのようなものがありましたか。あてはまるものをすべて選んでください。



体育の授業で学習成果のあがらない子どもの行動上の特徴を三つあげ、その対応方法を紹介してください。

- 先行経験の貧しさ
- 何をしたいか、わからない
- 自己の能力に対する知覚：できる気がしない
- 試行回数の少なさ、失敗回数の多さ
- 教師の関わり合い、期待の少なさ
- 仲間の関わり合い、期待の少なさ



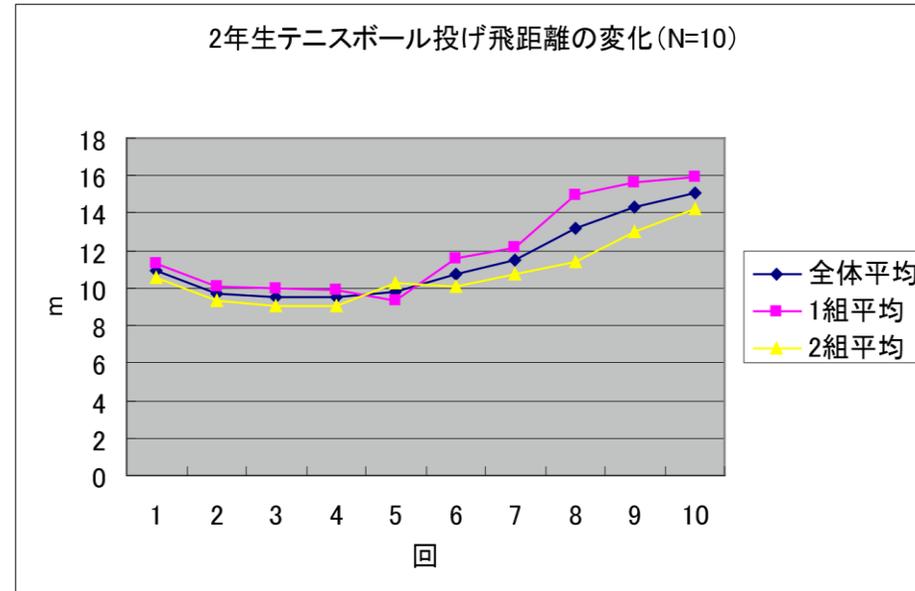
人間関係をめぐる環境は、児童の身体活動への積極的参加を促す要因になっている  
(NASPE,2009)

# 生徒は教えたことを学習する

## ：ゲーム指導の成果(Gray,2009)

- リサ（23才）とアンソニー（27才）（いずれも教職1年）が、4対4のゲームでバスケットボールのゲームパフォーマンス向上を目的に授業を5週間、実施。
- 授業の方法は、リサは問題解決の機会や論議の機会を提供する戦術学習を実施。空間の創造やボールキープのためのボールを持たない時の動きの学習を意図した。アンソニーは、学習指導要領に基づき、直接指導法でパスやドリブル等を直接指導で指導した。
- 戦術学習を受けた生徒はゲームの原理について多くを語り、技術指導を受けた生徒は技術的要素について多くを語っていた。
- 戦術学習を受けた生徒は、ボール操作並びにボールを持たない時の動きに関する状況判断能力が向上したと考えていた。しかし、技術指導を受けた生徒は、それが低下したと感じていた。

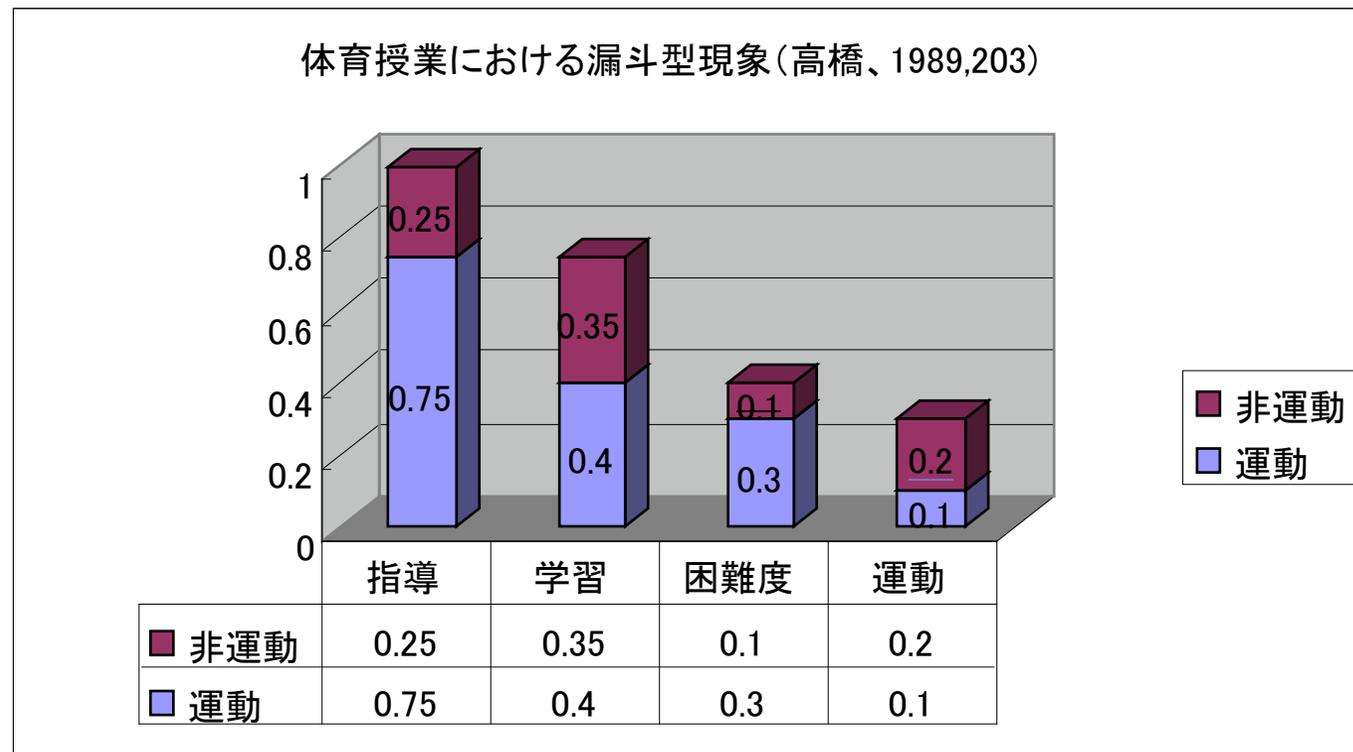
# 学習指導の成果としての投能力の変容



遠投距離の平均値の変化

	2年生平均	3年生平均	差の平均
非トレーニング群(N=21)	8.24	10.81	2.57
トレーニング群(N=10)	8.50	12.60	4.10

# 授業で運動学習に費やすことのできる時間は ごくわずかか



# 体育の授業を規定する三つの課題システム

- マネジメントに関わる課題システム(managerial task system) 授業の組織化や行動に関わる課題。  
(例) 体育館に入る。移動する。集団を作る。用具の片付け。
- 学習指導に関わる課題システム(instructional task system) 体育の教科内容の習得に関わる課題。  
(例)ペアで 6メートル離れてアンダーハンドパスを行う。
- 生徒の人間関係に関わる課題システム(student-social task system) クラス内の生徒の相互作用に関わる課題。  
(例) 楽しく友達とバレーボールをしている際に、外れた行動を取る。

# アメリカの高校にみられた カリキュラム改革の成果を規定する要因

これらの手続きを経て、データが 1)促進要因と阻害要因、2)実現レベル、  
3)生徒のパフォーマンス、4)説明責任の 4 観点から整理された。

## 1)改革促進要因

- ・ 管理職の援助と教師の共同
- ・ リーダー教師の役割  
(例) 共同の学習資料。メンター制度

## 2)改革阻害要因

- ・ 教師のコーチング志向
- ・ 生徒の規律の欠如、施設、用具の不備、
- ・ 生徒に責任を持たせられていないこと (Wirszyla,2002,16)



### III 質の高い授業の保証に向けて

－ 期待する資質・能力に対応した指導内容とその達成を保証する

学習指導モデルの適用－

# 授業研究に対する評価

○我が国では、教員がお互いの授業を検討しながら学び合い、改善していく「授業研究」が日常的に行われ、国際的にも高い評価を受けており、**子供が興味や関心を抱くような身近な題材を取り上げて、学習への主体性を引き出したり、相互に対話しながら多様な考え方に気付かせたりするための工夫や改善が続けられてきている。**こうした「授業研究」の成果は、日本の学校教育の質を支える貴重な財産である。

○一方で、こうした工夫や改善の意義について十分に理解されないと、例えば、学習活動を子供の自主性のみに委ね、学習成果につながらない「活動あって学びなし」と批判される授業に陥ったり、特定の教育方法にこだわるあまり、**指導の型をなぞるだけで意味のある学びにつながらない授業になってしまったりという恐れも指摘されている。**

○平成26年11月の諮問以降、学習指導要領等の改訂に関する議論において、こうした指導方法を焦点の一つとすることについては、**注意すべき点も指摘されてきた。**つまり、**育成を目指す資質・能力を総合的に育むという意義を踏まえた積極的な取組の重要性が指摘される一方で、指導法を一定の型にはめ、教育の質の改善のための取組が、狭い意味での授業の方法や技術の改善に終始するのではないかと**いった懸念などである。我が国の教育界は極めて真摯に教育技術の改善を模索する教員の意欲や姿勢に支えられていることは確かであるものの、**これらの工夫や改善が、ともすると本来の目的を見失い、特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態を招きかねないのではないかと**の指摘を踏まえての危惧と考えられる（中央教育審議会、2016, pp. 48-49）。

# 授業を受けた児童の感想文

- 私は、フォームの練習の時、最初はあまりできていませんでした。でも、下野先生や大学院の先生たちが教えてくれてできました。水の中でやってみるとあまりできなかったけど、S Tが教えてくれてだいぶできるようになりました。  
2時間でこんなにかわれるんだーと驚きました（A）
- 私は、前までは25mしか泳げなかったのに、50m、終には100mと練習するたびにどんどんレベルがあがって行って、私自身もうれしいけれど、下野先生のおかげでできたことなので感謝しています。最初は「うそー、泳げるわけないじゃん」と思っていたのに、今ではこんなに泳げる人が増えたのでびっくりしているし、三つのポイントがあるだけでこんなに変わるものなんだと勉強になりました。

## 自分で判断する楽しさ

- 中高の体育の授業のサッカーでの戦術を学ぶ機会があったがそれはいくつかの攻撃や守備のパターンを実践してみるという授業でしかなかった。今回のように自分の頭で状況判断しチームのメンバーと声を掛け合って戦術を組み立てることを体験できたのは非常に面白かったし、やみくもにボールを蹴る遊びのサッカーよりも断然楽しむことが出来た。ワールドカップは日本代表の試合しか見ていないが、日本代表の失点シーンを見るとゴール前でボールウォッチャーになってフリーの選手を作る場面が多々あると分かった。つまり、マークを外して裏に抜けたり中に走り込むような、相手選手のボールを受けるための動きを理解することが出来た。

# チーム内の役割があることの大切さ

- わたしが高校まで体育でやってきたサッカーでは、サッカーの経験者やスポーツが好きなひとたちが積極的にボールを動かしていて、わたしが何をしなくても点が入っていたり取られていたりした。しかし、この2ヶ月間でわたしがやってきたサッカーはわたしにも役割があって、それにチームの友達が何をすればいいのか具体的に、試合前にも試合中にも教えてくれたので、自分もゲームに参加しているという実感があつたし、だから単純に楽しかった。
- これまでと違って、ゲーム中に自分の役割を果たさなければならないので、ボールの位置と自分、仲間がどこにいてどこを向いていて、相手チームのメンバーがどこにいるのかをちゃんと見るようになった。自分がパスをつなぐためにどこにいればいいのかもだんだん分かるようになってきて、パスを上手く出すことはまだ難しかったけれど、動くことだけなら前よりもずっと出来るようになった。考えることは楽しかったし、それでチームの得点につながるというのは気持ちが良いものだった。

# 身体活動と学力の関係（アメリカ）： 学力改善の手がかりとしての身体活動

- 標準化されたテストの結果では、体育の授業時間数を削減しても学力は向上しない。
- 体育の授業時数や学校ベースで体を動かす時間の長い生徒は、標準化された学力テストの得点が向上させることができる。
- 積極的に身体活動を行っている児童の学力は高い。しかし、ここでは標準化されたテストが用いられているわけではない。
- 体力テストの得点と学力の間には肯定的な関係がみられる。
- 身体を動かす時間を組み入れることで、生徒の集中力や自尊感情の高まりが期待できる。

児童、生徒の学力向上に向けた政策策定者への提案：

学校内で提供する身体運動や体育の授業の量と質の改善が必要。

その実現に向けた方略設定には：

良質のプログラム、実行できる教師集団と管理職の支援、目的に対応した測定法の開発が求められている。

# 学習指導要領改訂の方向性（案）

平成28年5月26日  
体育・保健体育、健康、安全WG  
資料2-3

平成28年5月23日  
教育課程部会  
総則・評価特別部会  
資料3-1

## 新しい時代に必要な資質・能力の育成

学びを人生や社会に生かそうとする  
学びに向かう力・人間性の涵養

生きて働く知識・技能の習得

未知の状況にも対応できる  
思考力・判断力・表現力等の育成

## 何ができるようになるか

よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を共有し、  
社会と連携・協働しながら、未来の創り手となるために必要な知識や力を育む

「**社会に開かれた教育課程**」の実現

各学校における「**カリキュラム・マネジメント**」の実現

## 何を学ぶか

新しい時代に必要な資質・能力を踏まえた  
教科・科目等の新設や目標・内容の見直し

小学校の外国語教育の教科化、高校の新科目「公共  
（仮称）」の新設など

各教科等で育む資質・能力を明確化し、目標や内容を  
構造的に示す

**学習内容の削減は行わない\***

## どのように学ぶか

主体的・対話的で深い学び（「**アクティブ・  
ラーニング**」）の視点からの学習過程の改善

生きて働く知識・技能の習得など、新しい時代に求められる資質・能力を育成

知識の量を削減せず、質の高い理解を図るための  
学習過程の質的改善

深い学び  
対話的な学び  
主体的な学び

\*高校教育については、従来な事実的知識の増記が大学入学者選抜で問われることが課題になっており、そうした点を克服するため、重要用語の整理等を含めた高大接続改革を進める。

# 授業の楽しさはなぜ必要か：

## 学習者の論理に注目する

板倉の指摘した授業における「楽しさ」の位置づけ。あなたは、どの立場に立つのか？

- (1) 楽しいもの
- (2) 我慢するもの
- (3) 人に優越感を感じるもの
- (4) 人から落ちこぼれないもの

# 授業の成果を分ける二つの教育観

- 意図的教育観
  - ・自分が教えようと努力していることを重視する。
- 成功的教育観
  - ・教える行為が成功しているかどうかを重視する。

**秘密はどこにもない！**

# 学習指導モデルとは

- 「学習指導モデル(an instructional model)は、理論的基盤、意図している学習成果、教師に求められる内容面に関する専門的知識(expertise)、発達段階に即した発展的な学習活動、期待されている教師行動と生徒行動、独自の課題構造、学習成果の評価並びにモデルが確実に実行されているかどうかを判断する方法といった一連の内容を含み込んだ広範で一貫性のある計画である。」(Metzler,2000,p.14)

# 多様な学習指導モデル(Metzler,2000)

- 直接指導モデル
- 個別化指導モデル
- 協同学習モデル
- 仲間学習モデル
- 発問法モデル
- 戦術学習モデル
- スポーツ教育モデル

# 目標に準拠した評価に改める理由

## (平成 12 年 12 月 4 日教育課程審議会答申)

- ・ 児童生徒一人一人の進歩の状況や教科の目標の実現状況を的確に把握し、学習指導の改善に生かすことが一層重要であり、そのためには、目標に準拠した評価が適切であること
- ・ 教育内容を厳選し、基礎・基本の確実な定着を図ることを重視していることから、学習指導要領に示す内容を確実に習得したかどうかの評価を一層徹底することが必要であり、そのためには、目標に準拠した評価が優れていること
- ・ 初等中等教育における各学校段階において、児童生徒がその学校段階の目標を実現しているかどうかを評価することは、上級の学校段階の教育との円滑な接続に資する観点から重要となっており、そのためには、目標に準拠した評価を適切に行うことが必要となっていること
- ・ 児童生徒の学習の習熟の程度に応じた指導など個に応じた指導を一層重視しており、学習集団の編成も多様となることが考えられるため、指導に生きる評価を行っていくためには、目標に準拠した評価を常に行うことが重要となること
- ・ 少子化等により、かなり広範囲の学校で、学年、学級の児童生徒数が減少してきており、評価の客観性や信頼性を確保する上でも、集団に準拠した評価によるよりも、目標に準拠した評価の客観性を高める努力をし、それへの転換を図ることが必要となっていること

# 学習評価の意義と学習評価を踏まえた 教育活動の改善の重要性

- 学習評価は、児童生徒が学習指導要領の示す目標に照らしてその実現状況を見ることが求められるものである。学習指導要領は、各学校において編成される教育課程の基準として、すべての児童生徒に対して指導すべき内容を示したものであり、指導の面から全国的な教育水準の維持向上を保障するものであるのに対し、学習評価は、児童生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものと言える。

# パフォーマンス評価（真正の評価）と 行動目標に基づく評価の違い

- パフォーマンス評価：「一般的には、思考する必然性のある場面で生み出される学習者の振る舞いや作品（パフォーマンス）を手がかりに、概念理解の深さや知識・技能の総合的な活用力を質的に評価する方法」（石井、2015,p.56）。狭義には「学習者のパフォーマンスを引き出し実力を試す評価問題（パフォーマンス課題）を設計し、それに対する活動のプロセスや成果物を評価する「パフォーマンス課題に基づく評価」」（石井、2015,p.57）。
- 行動目標に基づく評価は、学習者の観察可能な行動のリストを作成しそれをチェックしていく評価。例えば、「テニスの試合に上手にプレーできる」という目標に対して、「サーブが打てる」「フォアハンドが打てる」等を設定し、練習場面や試合などでそれができる、できない、をチェックする方法（石井、2015,p.57）。
- しかし、行動目標に基づく評価でサーブやフォアハンドが一つ一つ上手であることは、テニスの試合に上手にプレイできることを保証しない（石井、2015,p.57）。

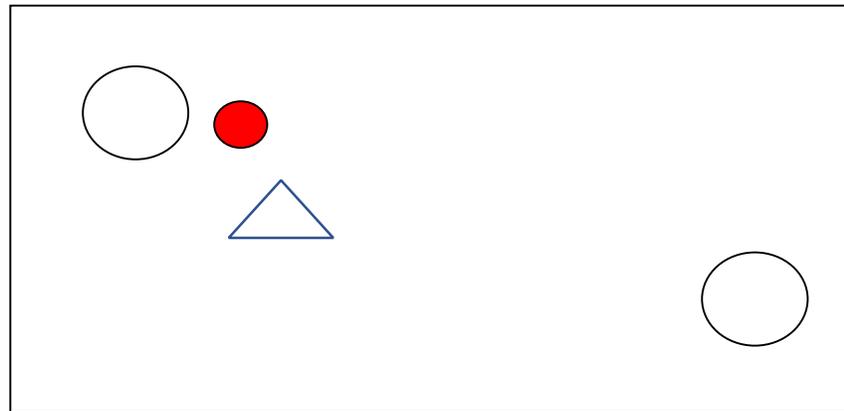
## 課題の明確なゲームとは？ 易しいゲームとは？

ー 学習を保証する教材づくりに向けてー

1) 2 対 1。30 秒間でできる限りパスの回数を多くする。

2) 2 対 1。30 秒内でボールキープの時間をできる限り長くする。

さて、二つのルールでは成果を収めるためになすべき行動は何が違うのか？



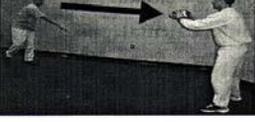
## 小学校 6 年生が身につけているサッカーに関する多様な知識

生徒	健全% (人数)	ありえる% (人数)	混乱% (人数)
得点 (攻撃)			
1.ゴールへの攻撃	59.0% (23)	18.0% (07)	23.0% (09)
2.攻撃時にスペースを生み出す	56.4% (22)	28.3% (11)	15.3% (06)
3.攻撃時にスペースを活用する	43.5% (17)	25.6% (10)	30.7% (12)
4.ボール保持	25.6% (10)	31.0% (12)	43.4% (17)
平均	46.2% (72)	25.6% (40)	28.2% (44)
攻撃阻止 (守備)			
1.ボールを奪う	38.6% (15)	30.0% (12)	30.7% (12)
2.スペースを守る	33.3% (13)	23.0% (09)	43.7% (17)
3.密集する	28.3% (11)	35.7% (14)	38.5% (15)
平均	33.0% (39)	29.7% (35)	37.3% (44)
全体平均	41.2% (111)	27.9% (75)	30.9% (83)

# ループリック

- 「成功の度合いを示す三～五段階程度の尺度と、それぞれの段階にみられる認識や行為の質的特徴を示した記述語から成る評価基準表」（石井、2015,p.60）
- 一般的な作成手順は、次の通り。
  - (1) 試行としての課題を実行し、できる限り多くの学習者の作品を集める。
  - (2) 観点の有無や何段階評価かを採点者間で確認しておく。
  - (3) 各人が作品を読み採点する。
  - (4) 次の採点者にわからぬように付箋に点数を記して作品の裏に貼り付ける。
  - (5) 全部の作品を検討し終わった後に全員が同じ点数をつけたものを選び出す。
  - (6) その作品を吟味し、それぞれの点数に見られる特徴を記す。
  - (7) 点数にばらつきが生じたものについて、採点者間の観点等のずれを明らかにしつつ合意を形成する（石井、2015,p.61）。

# ルーブリック

PASE PEER OBSERVATION SKILL CHECKLIST - THROWING									
<b>Directions:</b> Your partner will watch you throw 5 times for each instructional cue. If the cue is performed as the picture shows, then check "yes"; if not then check "no". Add the "yes's" and total them at the bottom. Use the rating scale below to evaluate your throwing performance and answer the questions at the bottom of the page.									
	Instructional Cue	Picture	Trial					Total "Yes"	
			1.	2.	3.	4.	5.		
Force Production	Side to Target		Y E S						+
			N O						
				6.	7.	8.	9.	10.	
	Big Step		Y E S						+
			N O						
				11.	12.	13.	14.	15.	
	Turn & Wrap		Y E S						+
			N O						
				16.	17.	18.	19.	20.	
Accuracy	Hit the Target		Y E S						=
			N O						
Total Score									

Throwing Rating Scale  
 0 - 8 Beginner     9 - 15 Intermediate     16 - 20 Advanced  
 What is your rating? \_\_\_\_\_  
 What will you do to improve your throwing force &/or accuracy? \_\_\_\_\_

Figure 8. PASE Peer Observation Skill Checklist - Throwing

(Referred to on p.10 & p.16)

- パフォーマンス、ポートフォリオ、成果を査定する採点指針(Lund et al.,2010,p.103)

- 内容スタンダード：  
生徒が知り、出来るようになるべき内容。それは、生徒が学習を期待される、専門科学にとって本質的な知識と技術を指す。

- パフォーマンススタンダード：  
どの程度できればいいのかの基準。それは、生徒が獲得すべき内容スタンダードのレベルを示すものである  
(NASPE,2004,pp. v - vi)。

# 中学校 1 年生のベースボール型授業で実施したゲーム（中垣、2009）

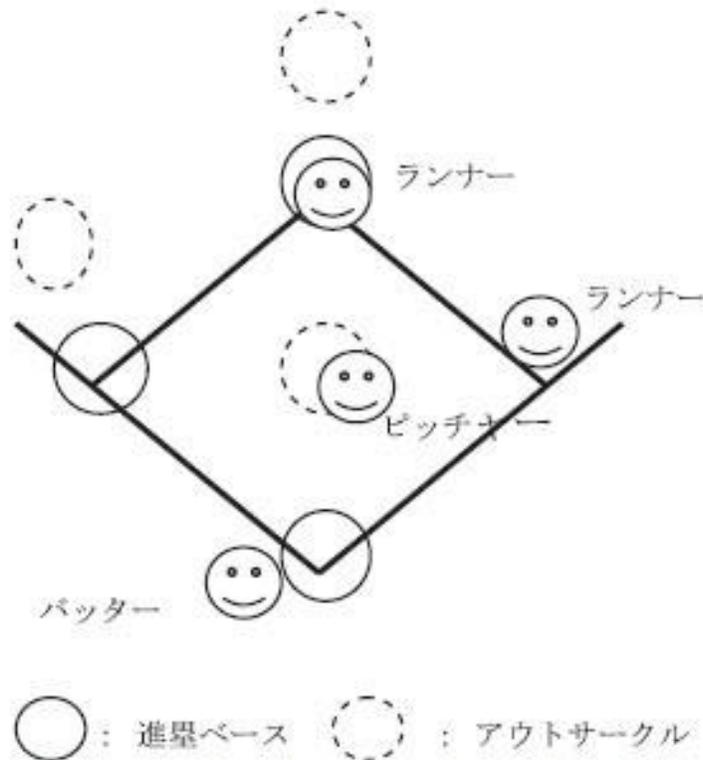


図1 メインゲームのコートの概略図

- 1) ゲームの人数は、5vs5 で行う。
- 2) ランナーは常に 1 塁 2 塁に置く。バッターは、打撃後 1 塁まで走らない。
- 3) バッターは、味方が投げたボールを打つ。
- 4) 打撃機会は、フェアグラウンドにボールが落ちるまで保障される。
- 5) 守備は、打球捕球後、アウトを取るためにいずれかの円の中に送球する。
- 6) アウトは、ランナーが塁に到達するより先に、守備者 1 人とボールがアウトサークルの中に入ることにより取ることができる。
- 7) 一度進塁したら元の塁には戻れない。
- 8) 得点は、ランナーが 1 ベース進塁するごとに 1 点。  
フライを捕球された場合は 0 点。
- 9) 攻撃チームの全員が打ち終わると攻守交代。

なお、単元後半で実施したメインゲームでは、5) のルールを、「守備は、打球捕球後、アウトを取るためにランナーの進塁先のアウトサークルに送球する」へと変更した。

表1 新学習指導要領における中学校のベースボール型ゲームの技能に関する教科内容（文部科学省，2008）

	中学校1・2年	中学校3年
バット操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・肩越しでのバットの構え</li> <li>・水平になるようなスイング</li> <li>・タイミングに合わせた打撃</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体の軸を安定させたスイング</li> <li>・高さやコースへのタイミング</li> <li>・ねらった方向への打ち返し</li> </ul>
ボール操作	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ゆるい打球に対応した捕球</li> <li>・大きな動作での送球</li> <li>・正面の送球をうける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・最短距離で移動した捕球</li> <li>・一連の動きでの送球</li> <li>・タイミングよく送球を受けたり中継したりする</li> </ul>
ボールを持たないときの動き	<ul style="list-style-type: none"> <li>・全力疾走での塁の駆け抜け</li> <li>・減速、反転による塁上での停止</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・円を描く走塁</li> <li>・打球に応じた進塁</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・守備位置での準備姿勢</li> <li>・ポジションごとの基本的な動き</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・進塁先のベースカバー</li> <li>・中継プレイに備える動き</li> <li>・ダブルプレイに備える動き</li> </ul>

表3 ゲームパフォーマンスの分析カテゴリー

課題	技能		定義	カテゴリー		
守 備	ボール操作の技能	捕 球	打球	ボールを落とさずに受けた	成功	両手を広げた範囲内のボールを対象とする
				ボールを落とした。あるいは後逸した。	失敗	
			ベースカバー	ボールを落とさずに受けた	成功	
				ボールを落とした。あるいは後逸した。	失敗	
			中継	ボールを落とさずに受けた	成功	
				ボールを落とした。あるいは後逸した。	失敗	
		送 球	打球処理後	捕球可能な範囲に送球することができた	成功	捕球可能な範囲は、両手を広げた範囲内のボールとする。バウンドは2バウンド以内とする
				捕球可能な範囲に送球することができなかった	失敗	
			中継後	捕球可能な範囲に送球することができた	成功	
				捕球可能な範囲に送球することができなかった	失敗	
			ベースカバー後	捕球可能な範囲に送球することができた	成功	
				捕球可能な範囲に送球することができなかった	失敗	
		送球に関する意思決定(進塁阻止ゲームⅡ)	適切な塁に送球した	先頭ランナーがアウトにできる時に、先頭ランナーの進塁先に送球した。	成功	
				先頭ランナーがアウトにできないが後方ランナーはアウトにできる。もしくは、後方ランナーの進塁先に近く、確実にアウトにできるとき、後方ランナーの進塁先のベースに送球した。	成功	
				両方のランナーともアウトにできないので、ボールを保持した。もしくは先頭ランナーの一つ先の塁に送球した。	成功	
				中継に送球した	成功	
			適切な塁に送球しなかった	上記以外の場合	失敗	

# 指導した内容の期待できる成功率はどの程度？

表6 送球の成功率の人数分布

成功率(%)	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~100
人数	0	0	0	0	0	2	5	13	9	3
累積人数	32	32	32	32	32	32	30	25	12	3
クラスの数に対する累積人数の割合(%)	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	93.8	78.1	37.5	9.4

表7 送球に関する意思決定の成功率の人数分布

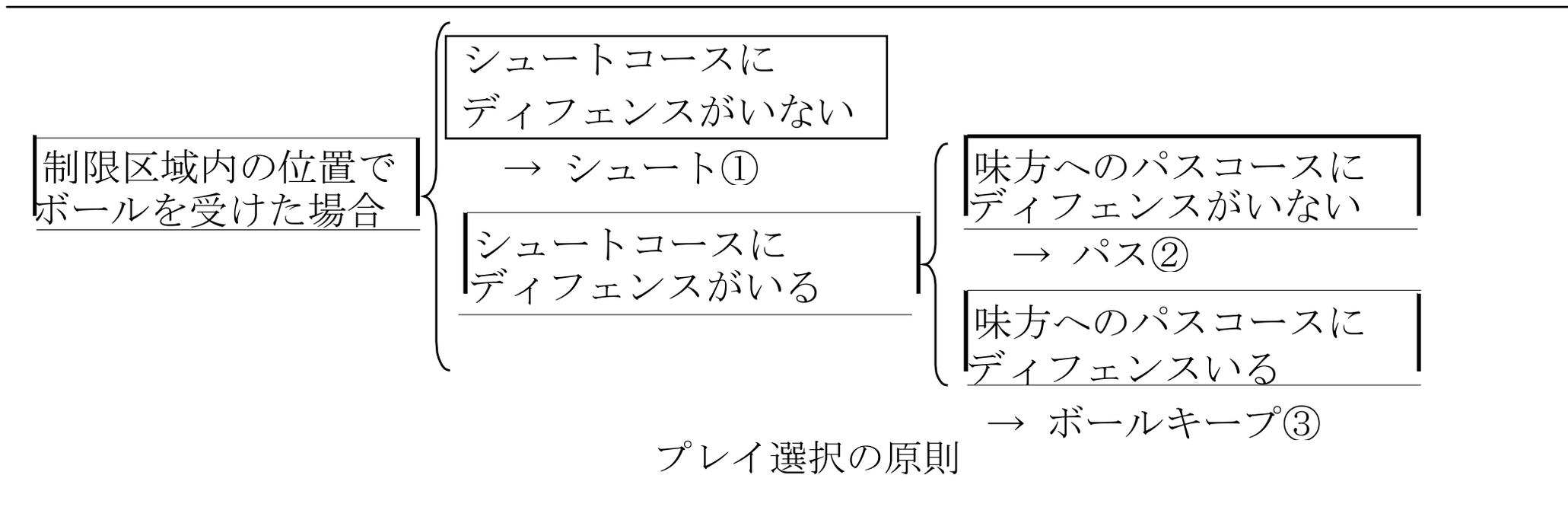
成功率(%)	0~9	10~19	20~29	30~39	40~49	50~59	60~69	70~79	80~89	90~100
人数	0	0	1	1	0	0	3	4	6	17
累積人数	32	32	32	31	30	30	30	27	23	17
クラスの数に対する累積人数の割合(%)	100.0	100.0	100.0	96.9	93.8	93.8	93.8	84.4	71.9	53.1

送球に関しては、80%の成功率を設定すると、通過できる生徒は37.5%。

送球先の判断に関しては、80%の成功率を設定すると、通過できる生徒は71.9%。

試行数そのものに、大きな差がみられた。最低は1回、最高は59回(15時間単元)。

# 提示したボール保持者の判断基準



コート上の位置

ボール保持か否か

人との関係

小学校 5-6 年生を対象としたバスケットボールの授業における指導内容例  
 (鬼澤、2007,p.64)

時間	学習内容	教師の関わり方
2 時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ノーマークシュート」の状況を理解する。</li> <li>・「ノーマークの状況を作り、シュートをしよう」が、単元のねらいであることを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「ノーマークの状況」「ノーマークシュート」について、実際にゲーム状況を作り、発問しながら指導する。</li> <li>・ゲーム中にノーマークの状況が出現したら、積極的に「ノーマーク」の声をかける。</li> </ul>
3 時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・目の前のディフェンスがないことを「判断する」ことの重要性を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールを受けたらまず、「リング」を見ること、その時に自分にディフェンスがついているか、ディフェンスとの距離を判断するように指示する。</li> </ul>
4 時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレー原則を理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際にゲーム状況を作り、ゲーム状況とそこでのプレーの選択をセットにしてプレー原則を指導する。</li> <li>・ゲーム中は、技能発揮へのフィードバックではなく、主に判断についてフィードバックする。</li> </ul>
5 時間目	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ボールを受けた位置(シュートエリア内/外)について判断することを理解する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・不適切なシュートエリア外からのシュート、1対1での無理なシュートに対して、ゲームストップ法を用いながら、その時のゲーム状況を理解させ、最善のプレー選択を指導する。</li> </ul>

# プレルボール（小学校４年生）の単元計画

（小林、2008）

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
オリエンテーション	準備運動・ボール慣れ・ドリルゲーム（プレルパスゲーム、サークルパスゲーム）								
	本時のめあての確認								
	タスクゲーム1 <b>リターン フレルゲーム①</b>			タスクゲーム2 <b>リターンフレルゲーム②</b>		メインゲーム <b>シュート フレルボール</b>			トーナメント戦
			タスク 2						

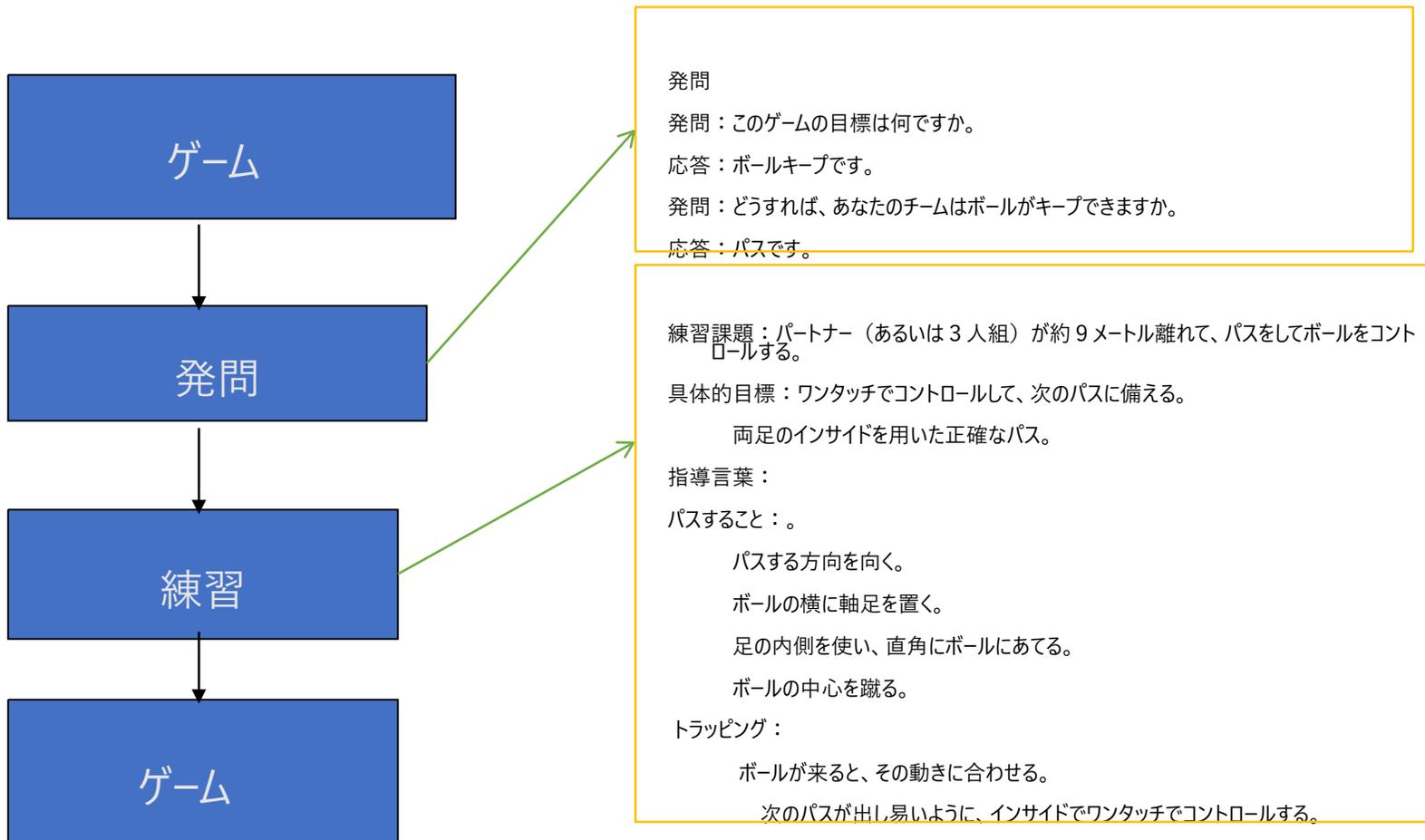
# ネット型での戦術学習モデル例

## ： 小学校 4 年生のネット型ゲーム

時	ねらい	発 問	核となる学習内容
1	学習の進め方を理解しよう。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習の進め方・準備の仕方・カードの使い方</li> <li>・運動の行い方・ゲームの仕方</li> </ul>
2	ボールを上手にプレルしよう。	「ボールを上手にプレルするためには、何に気をつけたらよいだらう？」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・指先や足の使い方、構え</li> <li>・ボールの正面への入り方</li> </ul>
3 4	みんなでボールをつないでゲームを楽しもう。	「チームで上手にボールをつなぐためには、何に気をつけたらよいだらう？」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セッターの体の向き・声かけ・パスの方向</li> <li>・構え・レシーバーの動き・基本ポジション</li> </ul>
5 6		「相手が返球しにくいシュートはどこをねらえばよいだらう？」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ネット近くやコート奥へのシュート</li> </ul>
7 8		<p>「ネット際やコート奥のほかに、返球しにくいところはどこだろう？」</p> <p>「シュートするときに、セッターはどのように動けばよいだらう？」</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・セッターをねらったシュート</li> <li>・後衛の二人の間をねらったシュート</li> <li>・左右のライン際をねらったシュート</li> <li>・シュート時や相手からの返球時のセッターのスペースを空ける動き</li> </ul>
9		「決定的なシュートを打つためにはどこをねらえばよいだらう？」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・効果的な場所への意図的なシュート (空いているところをねらったシュート(手前、奥左右)、セッターをねらったシュート、後衛の真ん中をねらったシュート、フェイントシュート)</li> </ul>
10	チームで力を合わせて、ゲームを楽しもう。		<ul style="list-style-type: none"> <li>・励まし合い、協力</li> <li>・身につけた技能でゲームを行う</li> </ul>

# 授業展開の手続きを共有する

## ー戦術学習モデルの展開案ー



導 入

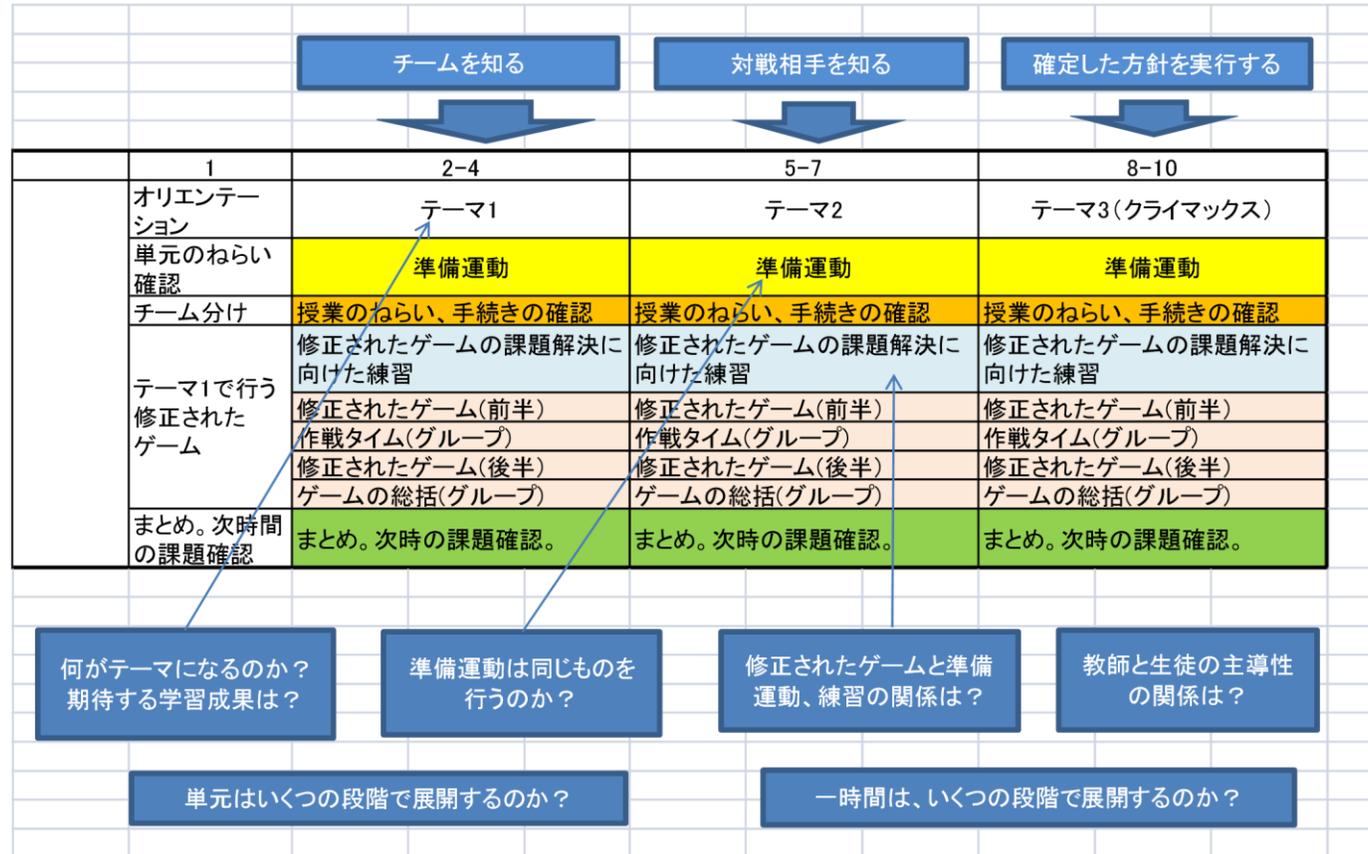
集团的思考

肯定的なかかわりを伴った取り組み

集团的達成と喜びの表現

集团的反省

# 単元構想に際しての検討事項



## 協同学習で設定される課題の違い(Metzler,2000,235-237)

- (1)すべてのチームに同一の課題を設定する。個人の得点の総数をチームの得点として、その伸びや設定して目標を達成状況を評価する
- (2)チーム内の個人の得点に順位を付け、他のチームと同じ順位の者が競い、得点化する
- (3)個人の取り組む課題を設定し、その成果を一定の基準に即して評価し、得点化する
- (4)チームや個人に達成すべき課題を割り振り、その達成状況を評価する
- (5)チームに課題を割り振り、収集した情報を踏まえた課題探求の成果を発表し、事前に設定された基準に基づき評価を受ける

協働学習の主たる特徴(Goodyear,2017,p.84)	
特徴	説明
肯定的な相互依存関係	生徒は、「彼がいないと自分たちが成功することはない」という関係で互いにつながっていると思っている。
個人の責任	グループ内の個々のメンバーの発揮したパフォーマンスと貢献は、評価され、その結果がグループにフィードバックされる。
肯定的な相互作用	生徒達は、グループの目標達成に向けて努力するように、互いに励まし合う。彼らは、信頼できる方法で、利用できる資源を交換し、フィードバックを与え、他人の視点を受け入れる。
改善に向けたグループでの省察	生徒達は、メンバーのどの行動が有益で有り、そうではなかったのかを振り返るとともに、どの行動を継続し、どの行動をやめるのかを判断する。
適切な社会的スキル	生徒達は、互いが信頼し合い、明確かつ正確なコミュニケーションを営み、互いを受け入れ、支援し合い、問題を解決できる能力を向上させるために、適切な、少人数で関わり合うスキルを教えられ、それを使えるようになる必要がある。
ファシリテーターとしての教師	生徒達は、教師からのみではなく、互いに学び合う。教師は、学習やグループの必要性を踏まえて支援するために、生徒を関わる。
異質集団	生徒達は、4-5人で構成さ、異なる能力や社会関係をもつグループ内で作業する。
協働学習の構造	教師は、例えば、ジグソーやチームでの達成分担方針等の、協働学習の構造を選択する。

Goodyear,V.A.(2017) Sustained Professional Development on Cooperative Learning:Impact on Six Teacher's Practices and Student's Learning. Reseach Quarterly fo Exercise and Sport. 88(1):83-94

協働学習認定ツール(CLVT)で設定されているカテゴリ-(Casey et al.,2015,p.647)

カテゴリ番号	カテゴリ名	カテゴリ番号	カテゴリ名
1a	社会的/情意的目標	11a	身体的側面の評価
1b	身体的/技能的目標	11b	認知的側面の評価
1c	認知的目標	11c	社会的、あるいは情緒的側面に対する評価
2	公平な異質集団 E	12a	身体的側面の改善
3	生徒中心の学習指導	12b	認知的側面の改善
4	ファシリテーターとしての教師	12c	社会的、あるいは情緒的側面の改善
5	協働学習の構造	13	自分評価、グループ評価あるいは仲間による評価
6	生徒が、所有権を共有している	14	生徒は、互いに励まし合う
7	フェイスツーフェイスで互いを促進する相互	15a	グループでの省察-何が起こったのか?
8	肯定的な相互依存関係	15b	グループでの省察-それで?
9	少人数並びに個人間で用いられるスキル	15c	グループでの省察-現在、何が?
10	個人の責任	16	学習成果に焦点化された長い時間
		17	生徒の関心、興味/励ましのレベルが高い

